

広島大学 グローバルインターンシッププログラム NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム(G.ecboプログラム)
—10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

2023年3月

第22号 Vol.15 No.1

目次:

With-corona における G.ecboインターンシップ プログラムの再開	1-2
世界で、日本で活躍する OB・OG	3-6
インターンシップ関連の 修士論文・博士論文	7
活動再開！ インターンシップレポート	8-10
就活体験記	11
受入機関の開拓・拡充へ 活動報告・事務局編集後記	12



G.ecboプログラムとは？



グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指すプログラムです。

With-coronaにおける G.ecboインターンシッププログラムの再開

去年の夏から海外出張した際、行き先の国でマスクしていると、「大丈夫ですか、ひどい病気でも?!」とよく聞かれるようになった。コロナ禍における日本の事情を説明すると、「日本は大変だね、第七の波ですか、なんでそうなるの?かわいそう」と同情されたり、不思議がられたりされることがほとんどだった。年末年始の海外出張では、街ですれ違う人からさえ、不思議な目で見られるようになった。あえてマスクをしていることについて聞かれると、「日本では第八の波が来ているので皆さんに移さないように」とそれらしい返事をするようになった。

1月にG.ecboプログラム受け入れ機関の開拓協議のため、フィリピン大学ロスバニョス校(University of the Philippines Los Baños: UPLB)及びイフガオ州立大学(Ifugao State University: ISU)を訪問した。そこで、広島大学から派遣する学生の受け入れをお願いしてまわった。その結果、2大学とも本プログラムの派遣学生をボランティアで受け入れてくださることになった。その際、私は現地に合わせて思い切ってノーマスクで過ごしてみたが、おかげ様でコロナの話題はあまり出なかった。コロナ禍でG.ecboの活動が停止していたこと、派遣先の機関とのパイプ役である先生方の定年、異動などによって連絡が途切れていることなどで、インターンシップ学生の受け入れ機関が減っている現状があった。その中で、両大学の受け入れ体制が整えられることは、本プログラムの今後の運営においてとても重要なことである。これらが、With-coronaにおける本プログラム活動を、以前の活動と同様に再開することの突破口になればと願うところである。学生の受入機関を増やすためには、さらなる開拓をし続けなければならない。体験を基に、多様な現場のニーズに対応し、多分野的に解決策を導き出す方法を考究するには、大学以外の組織;国際機関、I/NGO、第三セクター、コンサル会社、ベンチャー会社、ボランティア活動グループなどの開拓も待たれる。各方面のご協力を願う次第である。



MAHARJAN, Keshav Lall

G.ecboプログラム運営委員長
大学院人間社会科学部研究科
国際経済開発プログラム 教授
国際連携サステナビリティ学専攻
教授
大学院スマートソサイエティ実践科学研究院 Social Innovation Science
領域 教授

(2頁へ→)

(1頁より)

話が変わるが、2月の初めに在日インド大使と広島市内のホテルで夕食を共にする機会があった。その際、大使はノーマスクだったが、私はマスクをしていた。食事の前の歓談で、話が弾み、大使に「Do you mind if I take away the mask? (マスクを外していいですか)」と聞いたところ、大使は「No not at all. You see, I have 5 vaccines and 2 times affected by corona, so I must have the strongest immunity built up (全く問題がないよ。私は5回のワクチンを打っているし、2回コロナにかかった、なので一番強い抗体力があるのでは)」と笑いながら返事をされ、和やかな雰囲気です。私は、西条への帰りの電車の中で、日本におけるコロナの医学的位置づけ、マスクの使用、入出国の際の手続き、今後のG.ecboプログラムの運営について静かに考えていた。

2021年度は「バーチャルインターンシップ」も一つの試行として検討した。しかし、「問題解決型方法で現場のニーズを把握し、学び、多分野的に対応することを主目的」とする本プログラムの目的の達成、その教育的効果を保証しうるとは限らないとして、見送った。当時の欧州の大部分の国々のように、COVID-19を一種の風土病として捉え、コロナと共生できる時期の到来を大いに期待した。

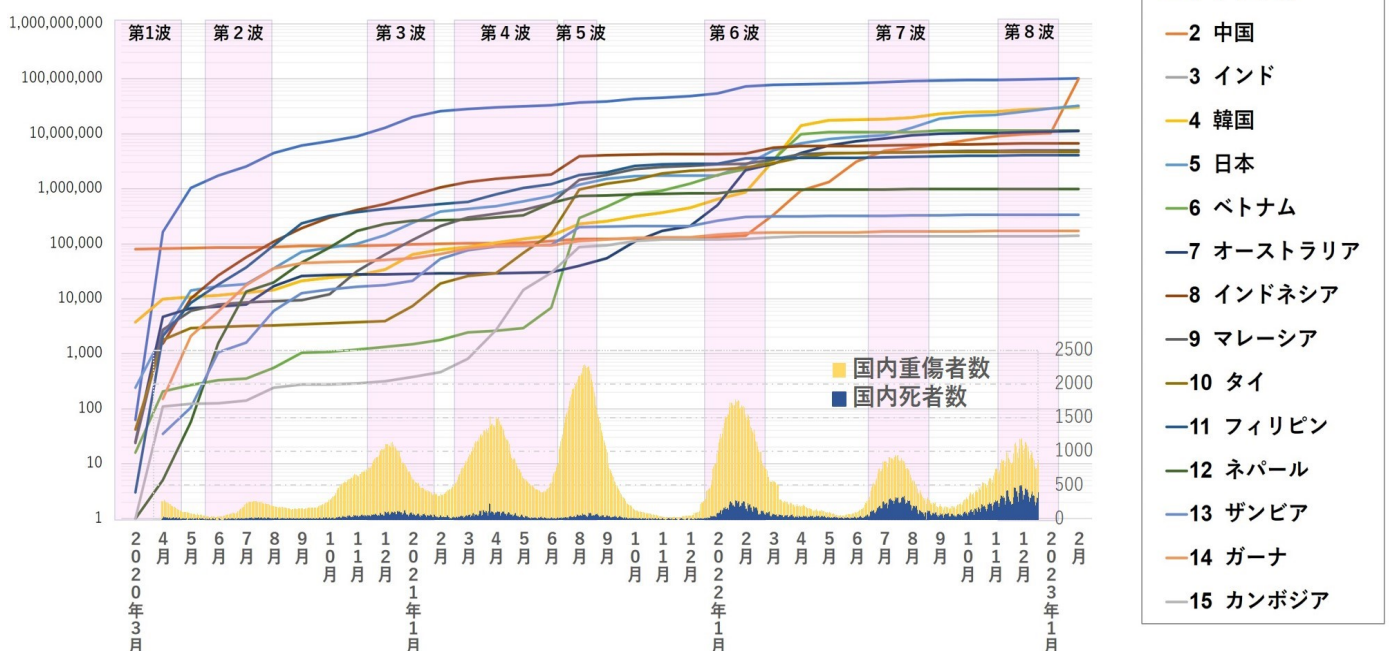
そして、2022年度の前期においてオンラインでのインターンシップを実施、後期においては実際の派遣に伴う従来どおりの対面インターンシップの再開ができた。いずれのインターンシップも、参加した学生達は多くを学ぶことができた満足している。私自身も、インターンシップの事前事後の発表で当該学生の確かな成長を見ることができた。受け入れ機関からも、当該学生らのインターンシップの評価は高い。また、このご時世の中、インターンシップの実施が感謝されたことに喜びを感じている。早くも昨年の祈願である「コロナと共生してG.ecboの活動ができること」が実現できたことは、学生らの学ぶ意欲、受入先のホスト機関をはじめとする皆さんのご理解とご協力の成果に他ならない。

来たる5月からは、日本においても新型コロナウイルスは季節性インフルエンザと同じ5類に移行され、色々と緩和されることになる。とはいえ、次々と変異する新型コロナウイルスは、油断が禁物かもしれない。これからは、社会全体が自然に適応し、抗体を持ち、必要な場合には医学の力を借りながら、新型コロナウイルスと共生する時期を迎えることになるであろう。本プログラムの運営もそれに沿って、2023年度はWith-coronaにおけるG.ecboインターンシッププログラムを推進したい。引き続きご協力をお願い申し上げます。

With corona, With conscious mind

G.ecboプログラム運営委員長
マハラジャン、ケシャブ・ラル

関連国別COVID-19感染者数推移 (2023年2月)



※感染者数累計 : WHO Coronavirus(COVID-19) Dashboard より、2020年8月までは1日の、9月以降は1週目のデータを抽出

※国内重傷者・国内死者数 : 厚生労働省オープンデータより抽出

左右田 あみ さん SODA Ami

2010年度 ケニヤッタ大学(ケニア) 派遣 / 国際協力研究科(教育文化)修了

◆近況、現在の仕事について

現在ザンビアで、JICA農業専門家として働いています。IDECで教育文化専攻だった私は、農業分野の仕事は毎日が勉強で、チャレンジな日々が続いています。私の担当地域は根強い独自の文化、部族性を持っており、ザンビアの方からも「あそこは、仕事をするのが難しい地域だ!」と言われるような地域です。そんな場所で、新たな農業普及開発を進めるための効果的な開発は何か? 自分に問いかけながら思案しています。

◆インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら?

『知は力なり』。インターンシップの活動は、単なる体験や経験ではありません。インターンシップでの活動経験を基に、さらなる経験・体験を重ね学びとして飛躍しながら自分を進化させていく、こうした一連の流れをインターンシップ後から繰り返し続けているような気がします。



IDEC卒業以来の村の人々との関り。
やっぱり、村での調査は楽しい!

◆G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面や局面について

現在の仕事は、判断力と交渉力、そして効率的かつ効果的なプロジェクトアプローチを考えることが求められています。G.ecboでは、派遣先が決定後、現地の活動先への連絡や活動の説明を自ら行い交渉をしなければなりません。現地で活動するためのこれら能力は、G.ecboで培った現地調整力と交渉力が役に立っていると思います。

◆G.ecbo経験の中で、自分の中に残り根付いていると感じるもの、さらに発展していると感じるもの

アフリカの生活が初めてで、ケニアの活動およびカウンスラー宅でのホームステイ生活など、すべてが新鮮で様々な事を体験しました。IDECを卒業後ザンビアへ渡り生活をしていますが、G.ecboの経験がアフリカでの生活を支える基盤となり、現在の生活を構築し発展させていると思います。

【 2010年ケニヤッタ大学(ケニア)での生活&活動 】

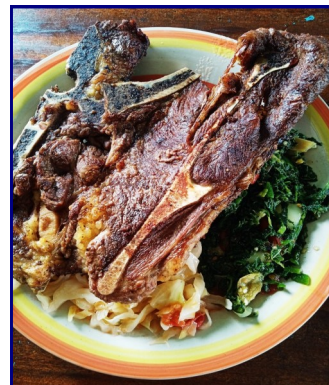


Ugali (アフリカ伝統の食品)調理の様子。インターンシップ中のホームステイ先では、Mandazi(ケニア風ドーナツ)作りや、炭火コンロを使ったアフリカ料理作りも習いました

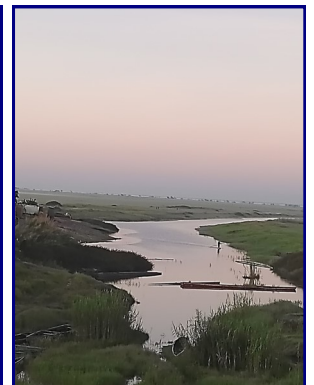


ケニヤッタ大学の授業にも参加

【 ザンビア紹介 】



ザンビアはアフリカの中でも、T-boneステーキがおいしいとされています
仕事で頑張った時のご褒美です



アンゴラへ続くザンベジ川。雨季には、この川が氾濫し、一面がさらに大きな川となります

ー後輩へのアドバイス

現地の人々との関わりは、文化や言語の違いによって理解が難しく苦労することがあります。しかし、一度心が通い合う瞬間があったとき、それは今後のあなたの人生を大きく変えるものであり、経験が宝としてあなたの一生の財産になるかもしれません。それはあなただけでなく、あなたと出会ったすべての人にとっても...

大矢 祥平 さん OHYA Shohei

2011年度 株式会社アルメックVPI（ベトナム）派遣 / 国際協力研究科(開発技術)修了

◆近況、現在の仕事について

2013年に総合商社に入社して以降、都市開発・不動産系の部署で勤務しています。現在は、米国企業との合弁会社に出向してデータセンターの開発に従事しています。

◆インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

「道半ば」です。G.ecboでベトナムの開発コンサルタント企業にてインターンを経験もあって海外志向が高まり、とりわけ海外での都市開発に関与したいと思い総合商社への入社を選択しました。これまで国内外のいろいろな業務に携わってきましたが、当時抱いていたような大規模な都市開発をリードするような仕事はできていない為、引き続き実現に向け邁進していきたいと思っています。



出向先にて実施した軽井沢合宿での
昼食時の写真

◆G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面や局面について

以前の部署ではインドネシアにおける交通関連の事業開発に携わっていました。COVID-19の影響もあり事業化には至りませんでしたが、そこでは、JICA、開発コンサル(インターンシップでお世話になったアルメック様とも接点を持ちました)に助言を頂きながら、自社で仮説を立て、現地スタッフやパートナー候補等へのヒアリングをしてFSを実行していました(インドネシアではIDECのOGにも再会できました)。これはまさにG.ecboのプログラムそのものであり、G.ecbo時代を懐かしく感じながら業務に当たっていました。具体的にこれだというものは挙げできませんが、学生時代にG.ecboという実践的な教育プログラムを経験していたことは前述の業務においても生きていたと感じます。

◆G.ecbo経験の中で、自分の中に残り根付いていると感じるもの、さらに発展していると感じるもの

「海外志向」です。いい意味でも悪い意味でも東広島で生活して大学に通学する毎日を過ごしていると、グローバルな環境に飛び込もうと思うきっかけは得られ難いと思います。(今は違うのかも知れませんが。(笑))

私自身としてはG.ecboというきっかけがあったからこそ海外志向がより高まったと思いますし、社会人になってから海外とのビジネス、外国籍のスタッフとのコミュニケーションで壁にぶち当たることは多々ありますが、今まで何とかやってこれているのはG.ecboをはじめとした学生時代の経験によりできた礎のようなものがあるからではないかと感じたりもします。

【2011年インターンシップ@ベトナム・ハノイ】



実際のオフィスに滞在したことで、開発コンサルタントの仕事の面白さ・様子を
知ることができました
休日は積極的に現地を歩いて回ったり、ハノイ以外の都市に赴て、ベトナムの
文化や歴史を体感しました

【インドネシア出張時にIDEC時代のOGと再会しました】



Maiさん



Erniさん

ー後輩へのアドバイス

学生時代、スティーブ・ジョブズがスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチを聞いて自分を鼓舞していたように記憶しています。将来何がどう役立つかわかりません。学生の間は失敗を恐れず、いろいろな挑戦をして多くの経験をして
おくと良いのではないかと思います。

延川 裕樹 さん NOBEKAWA Yuki

2011年度 ケニヤッタ大学（ケニア）派遣 / 国際協力研究科(教育文化)修了

◆近況、現在の仕事について

IDEC修了後、兼松株式会社で働くことにしました。修士研究とはかけ離れたのですが、入社後4年間は国内外製半導体の営業担当でした。その後、シンガポール支店での半年間の勤務を経て、米国加州に1年間の長期出張。帰国後に先進技術を活用した事業開発に従事しており、海外ITベンチャーとの協業や、国内ITベンチャーに出資を主導して、現在は、国内出資先に出向中です。



日本貿易会「商社シンポジウム2019」にて
約800名の前でパネルディスカッション！

◆インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

「自分の信じる道」。大学時代は教育学部に所属しており、途上国教育に関心を持ちIDECに入学しました。各国間にある不平等や格差を教育から変えられないかという素直な気持ちからでした。

G.ecboをきっかけに修士研究のフィールドをケニアに決めて、現地調査を実施しました。教育による格差是正という初心は、最低限の社会インフラ構築に変わっていました。

現地調査時に子どもが未整備の校庭を裸足で駆け回っていました。ごろついた石ころやガラス片などが転がっていたと思いますが、子どもが何かに足を引っ掛けて足先から出血してしまいました。日本だと直ぐに病院だと思いますが、現地では早退という判断で、私は衝撃を受けました。子どもが安全に学校生活を送るには最低限の社会インフラが必要...と思った瞬間です。

これが商社に決めた出来事であり、場所ごとで感じた自分の気持ちに従った結果です。G.ecboは、まさに私に新たな「気持ち」を提供してくれました。

◆G.ecbo経験の中で、自分の中に残り根付いていると感じるもの、さらに発展していると感じるもの

「次世代」。現在はIT事業ですが、この「気持ち」は卒業後も変わらず根付いています。ITは意図も容易く越境できますので、当時、私が感じた「社会インフラ」というものが「ハードウェア」から「ソフトウェア」に変わり、「ソフトウェア」を通じて格差是正を成し遂げることが新たな「気持ち」です。また、結婚や出産という人生での大きな出来事を経験してきた中で、入学時に感じていた「途上国」というキーワードが「次世代」というものに発展してきた気がしています。

社会人10年目となり、「格差是正」に貢献するというのが如何に難しいことであるかを痛感していますが、「次世代」に少しでも良いものを残せる様に日々邁進しています。

【2011年インターンシップ@ケニア・ナイロビ】

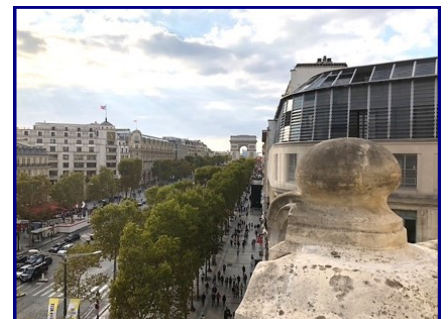


教員組合のストライキによる学校閉鎖を経て、ようやく小学校訪問。修士研究のパイロット調査を実施しました



ナイロビ市内にて
ルームシェアをし、多くの刺激を受け、お互いを高めあえる仲間に出会いました

海外ベンチャーからの景色



ー後輩へのアドバイス

私にとってG.ecboが初めてのアフリカ上陸で、正直、不安な毎日をごとただけでした。ただ、突き動かされる「気持ち」に出会うことができました。「気持ち」なくして自らを奮い立たせることはできませんので、皆様にとってG.ecboが新たな「気持ち」に出会うきっかけになることを心から願っております。

作本 安浩 さん SAKUMOTO Yasuhiro

2014年度 JICAインドネシア事務所（インドネシア）派遣 / 国際協力研究科（開発政策）修了

◆近況、現在の仕事について

一般職の国家公務員として、所管業務に関する申請の受付や審査などの行政事務に従事しています。

◆インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

修練でしょうか。IDEC卒業後も、語学能力や専門分野の法令など、仕事に活かせる技能や知識の習得に努めています。

◆G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面や局面について

インターンシップ中に海外での困難を乗り越えたことは、就職活動において、自信を持てる要素になったと思います。また、面接の際に話のネタにもなったと思います。異国の地で、現地のスタッフと協力しながら何かを行うようなことは、簡単に経験できることではありませんので、面接をする方も興味を持って聞いてくれたと思います。実は私は在学中最初の就職活動はうまくいかず、現在の職場は最初の就職活動後、G.ecboを経験した後に改めて行った就職活動で内定をもらった職場になりますが、2度目の就職活動は、自信を持って臨めたこともあり、G.ecboでの経験をしていなかった最初の就職活動に比べてうまく進められたと思います。



2019年9月インドネシア観光

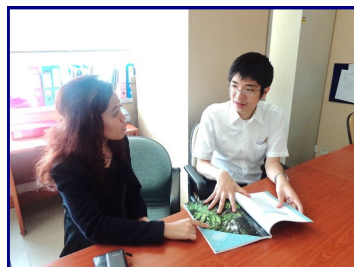
◆G.ecbo経験の中で、自分の中に残り根付いていると感じるもの、さらに発展していると感じるもの

インターンシップ中は、派遣先の方が行う、インドネシアの現地住民への聞き取りや、森林地帯でのフィールド調査に同行するなど、知らない言語が飛び交う知らない土地で、日本とは全く違う環境で活動することとなりました。就職後は、人事異動によって知らない土地や部署に行くことも多いですが、知らない土地や環境にも不安や恐怖を持たず、前向きに楽しめています。それは、G.ecboで、自分がかつて経験したことのないような環境下で、何とか乗り越えた経験をしたことが大きいと思います。また、多少のことでは折れない精神力も身についたと思います。

【 2014年インターンシップ中の写真 】



活動中、最も印象に残ったことは、プロジェクト参加中にJICAの専門家の方が行ったフィールド調査への同行したことでした



Lombok（ロンボク島）にて森林保全の様子を見学しました



nangka（インドネシア語）＝ジャックフルーツ

－後輩へのアドバイス

私の修士論文は、森林保全と国単位の経済データを関連づけたどちらかと言えばマクロな分野での研究で、直接インターンシップの内容が修士論文の内容に影響するものではありませんでしたが、それでもミクロレベルの地域特有の現状や取り組みを直接見られたことは貴重な体験で、研究を行う上で視野が大きく広がりました。

学生時代の経験は貴重です。後悔のないよう、事前準備と計画をしっかり立てて、行動しましょう。インターンシップに先立って自分がしたいことや、周囲の助けがほしいことがあれば、しっかり主張していった方がいいと思います。



インターンシップ関連の修士論文・博士論文

(対象期間:2019年4月～2023年3月)



本プログラム参加者28名が、大学院を修了しました(修士課程修了23名, 博士課程修了5名)
そのうち17名が、インターンシップの成果のもとに修士論文・博士論文をまとめました

* 博士課程後期学生対象・遡上教育型インターンシッププログラム参加者

修了日	所属・氏名	論文タイトル
2023年3月	人間社会科学研究科 * GONZALVO CLARISSE MENDOZA	Farmer Decision-Making on the Concept of Coexistence: A Comparative Analysis Between Organic and Biotech Farmers in the Philippines
2023年3月	国際協力研究科 * PHYU PHYU ZAW	A study on Mindfulness : the Role of Awareness and Acceptance
2022年3月	文学研究科 * 深谷 康佳	ケラビット語バリオ方言の記述文法
2021年3月	国際協力研究科 大方 芳恵	日本語言語学「動詞「ナル」の意味拡張について—「ことになる」の用法を中心に—
2021年3月	国際協力研究科 ESHUN FELIX KWAMINA EGYIR	Daily Departure Time Learning Dynamics of Commuters Using Smart Application: Case Study in Accra
2021年3月	工学研究科 竹本 佑	FRPおよび押出しアルミ材の材料強度とその評価に関する研究
2021年3月	国際協力研究科 角 惇平	Investigation of indoor and outdoor air pollution and respiratory health in unplanned urban houses in the hot and humid climate of Indonesia.
2020年9月	国際協力研究科 孫 瑜	Intrinsic and Extrinsic Motivation to Classroom Learning: A Comparative Study between Migrant Children and Local Children in The Urban Public Middle School, Yantai, China
2020年9月	国際協力研究科 * USWATUN HASANAH	STEM Education for the Crucial Thinking Skills in Indonesian Science Education
2020年9月	国際協力研究科 MOHAMMAD ROBIUL AWAL KHONDAKER	Role of Sanitation Microfinance on the Improvement of Sanitation condition and Nutrition Condition of Under-five Children in Rural Bangladesh.
2020年9月	国際協力研究科 HANIEF ARIEFMAN SANI	Indoor Air Quality and Its Effects on Health among Urban Residents in Major Cities of Indonesia
2020年9月	国際協力研究科 PENG BUNHEANG	Intergenerational transmission of school education: impact of self-monitoring on household electricity consumption in Phnom Penh city
2020年3月	国際協力研究科 * MAHARJAN SHREE KUMAR	Factors affecting climate change adaptation in agriculture in central and western Nepal
2020年3月	国際協力研究科 植村 兼三	インド西ベンガル州におけるストリートチルドレンのNGO参加に関する意思に影響を与える要因—NJP駅周辺の家族と同居するストリートチルドレンに着目して—
2020年3月	国際協力研究科 谷本 葵	Development of Radiant Floor Cooling System Using Phase Change Material under Hot and Humid Climates
2020年3月	国際協力研究科 藤井 真明	インドネシアのカンポン住宅地における居住環境が日常生活行動に及ぼす影響の分析
2019年9月	国際協力研究科 RASOANJANAHARY TANTELY NIRINA	Factors Affecting Students' Choice of University from the Perspective of Distance Learners, Case of the National Center of Distance Education in Madagascar

夏期はオンラインで1名、冬期は2名を現地へ派遣し、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大以来、2年ぶりに活動を再開しました。G. ecboのオンライン型インターンシップは、「問題解決型方法で現場のニーズを把握し、学び、多分野的に対応する」というプログラムの主目的を維持できるかどうか最大の問題の中、2006年度以降多くの学生を受け入れてくださっている株式会社アルメックVPI様のご協力のもと実現しました。実りある研修となったようです。

Mensah Ewurasi Boafowa (メンサー エウラシ ボアフワ)さん

人間社会科学研究科/博士課程前期/国際経済開発プログラム

Host	アルメックVPI (フィリピン)
Period	2022年 9月 14日 - 10月 13日
Location	オンライン



－G.ecboプログラムへ応募した時、どんなことを期待していましたか？

During the time I was applying for the program, I realized the program was well organized and well structured. My expectations were to learn and develop myself professionally.

－研修内容について

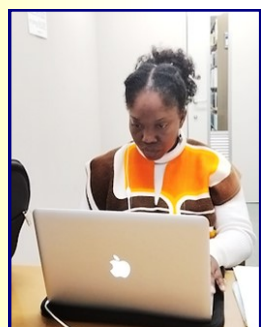
During the internship, I had the opportunity through my internship Supervisor at ALMEC, Philippines to learn what a TOD (the Transit-Oriented Development) project is. TOD refers to integrated urban places designed to bring people, activities, buildings, and public space together, with easy walking and cycling connection between them and near-excellent transit service to the rest of the city. I also learnt about the TOD projects financed by JICA in several countries. I learnt also about TOD projects across the world not financed by JICA.

－このインターンシップで一番得たもの

I had the chance to broaden my global professional connections by networking with officials of ALMEC Corporation in Tokyo, Philippines and JICA officials in the Philippines office with strong expertise in transportation and urban planning. With the use of social media and apps like Skype and Zoom made it easy to actively pursue conversations get support from my internship Supervisor though I was in Japan and she was in the Philippines.

－メリット

With the issue of the COVID-19 pandemic, an online internship was the best for me. I had the chance to broaden my global professional connections by networking with officials of ALMEC Corporation in Tokyo, Philippines and JICA officials in the Philippines office with strong expertise in transportation and urban planning.



オンライン業務の様子

－デメリット

While I was able to accomplish tasks assigned to me because they were designed for an online experience, there are times I missed the in-person interaction, like the workplace culture of dealing with coworkers.

However, the use of social media and apps like Skype and Zoom made it easy to actively pursue conversations and get support from my internship Supervisor though I was in Japan and she was in the Philippines.

－インターン経験を今後どのように生かしていきたいですか？

The online internship was a great opportunity for my professional development, relationship building, and skill sharpening as I had the opportunity to intern remotely in a reputable Japanese owned consultancy company called ALMEC Corporation's overseas department in the Philippines.

－事前準備について

I had to ensure that I had installed all the applications like skype, zoom and Microsoft teams for an effective online internship. I also had to make sure my webcam was working well. I also made sure I could share presentation files during an online meeting was possible. Ask relevant questions before you start the internship.

－後輩へのアドバイス

It is good to complete all the jobs assigned to you well because it can create job opportunities for you in the future.

Dasguputa Shamit (ダシュグプタ ショミット)さん

人間社会科学研究科/博士課程前期/国際経済開発プログラム

Host	カンボジアメコン大学 (カンボジア)
Period	2023年 1月 21日 - 2月 28日
Objectives	◦ To find out the “Perception of university students on Women empowerment- Evidence from list experiment in Cambodia” ◦ To experience working in International setting, increase research skill and learn the challenges of conducting a research.



秘境 Koh Rong Island (ロン島)にて。
週末ツアーに参加し、プランクトンが煌
めく夜の海で泳いだことは忘れられま
せん

ー広島からプノンペン(カンボジア)への旅

1月21日(土)、私の一日はいつもより少し早い、早朝4時30分に始まりました。カンボジアへの旅の始まりです。関西国際空港からのフライトに間に合うよう、始発の電車にのりました。約16時間のフライトを経て、プノンペン国際空港へ到着。私の研修先であるカンボジアメコン大学(CMU)の日本語ビジネス学科長の樋口先生が迎えに来てくださっているのを見て、とてもうれしく思いました。先生は、私がカンボジアの生活を円滑にスタートできるよう、心配りをしてくださいました。この日は空港近くのホテルへ宿泊しました。出発当時の気温0度の日本から35度のカンボジアの気候変化は少し大変でしたが、数日で慣れました。

ー研修先のカンボジアメコン大学(CMU)へ

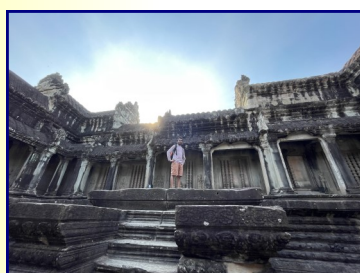
1月23日(月)、カンボジアに30日以上滞在するためのビザ延長を申請し、いよいよ研修先であるカンボジアメコン大学訪問です。そこで、副学科長のKay Rithy先生と初対面。大学内を案内していただき、滞在中の研修計画・研究全体の進め方について改めて話し合いました。樋口学科長の執務室にデスクを割り当てられ、ここで研究活動を行うことになりました。1月31日(火)、CMUの大学長のThero先生にお会いし、研究テーマについて長い議論をしました。クメール文化と伝統に合わせいくつか修正し、学生たちが理解しやすいようにアンケートをクメール語にも翻訳することにしました。この翻訳は、CMUの学生の助けを借りて行いました。また、研究の方法論についても話し合い、カンボジア・バングラデシュ(私の母国です)・日本の異なる文化についても意見を共有しました。

倫理審査の承認を得た後、CMUの学生を対象とし、予備データの収集を開始しました。これまでに137件の回答を得ました。よりよい調査分析と影響力のある結果を得るため、今週は少なくとも300件の回答を期待しています。

ー私の経験の共有とディスカッション



私は以前、バングラデシュで銀行員として働いた経験があります。銀行員としての経験や日本での学生生活、そのほか個人的な経験を学生達に共有し、約1時間ほどディスカッションを行いました。カンボジア・日本・バングラデシュの生活と文化、政府および民間機関での経験について説明しましたが、学生達は留学について得に興味を持っており、盛りだくさんのセッションとなりました。このディスカッションが、私が広島大学へ留学を決めたように、学生達が海外でより高い研究を追求し、のちにカンボジアの発展に貢献したい希望するような十分な動機付けになったことを願っています。



ーカンボジアでの生活、観光

研究活動のほとんどはプノンペンでしたが、週末はいろいろな場所を訪れました。観光地近くの屋台やレストランではなく地元の料理を試し、クメール料理の本当の味を味わいました。どれもとても美味しかったです。週末はシエムリアップへ行き、世界最大の宗教的モニュメントであるアンコールワット観光をしました。プノン・クーレン国立公園の断崖絶壁 Poen Ta Kho(プーンタコー)では興奮しました。G.ecboプログラムに参加したことで、カンボジアの生活、文化、美しい自然を体験する機会を得ました。

My wonderful experiences while doing my research at the majestic Banaue Rice Terraces and working as an RA at the G.ecbo Program

Gonzalvo, Clarisse Mendoza (ゴンザルヴォ, クラリス メンドザ)さん

人間社会科学研究科/博士課程後期/国際経済開発プログラム

Host	イフガオ州立大学 (フィリピン)
Period	2022年 12月 8日 - 2023年 1月 20日
Location	イフガオ



バナウェ ライステラス(棚田)。「天国への階段」と称され世界遺産に登録されています

From December 2022 to January 2023, I did my internship at the Globally Important Agricultural Heritage System (GIAHS) Research Center of the Ifugao State University (IFSU). I focused on the Ifugao Rice Terraces, which is the only GIAHS in my country designated by UNFAO in 2011, and designated as a World Heritage Site by UNESCO in 1995. I did my data gathering at the Banaue Rice Terraces, specifically in Batad and Bangaan, which are two out of five GIAHS clusters in the Philippines. There, I studied the environmental conservation agriculture (ECA) adoption of the farmers, as well as the biodiversity conservation and heritage tourism in the area. It was a very exciting and insightful internship, and I am planning to publish a paper based on my data gathering.

The people in Ifugao are so friendly and you can really enjoy what nature has to offer. Being able to talk to the locals and farmers gave me a renewed sense of motivation to do my research well. The government officials that I talked to are also curious to read the possible publications of my research, and they said that they want to incorporate it in their policy framing. During my stay, I was able to obtain a lot of books and resource materials, which are all useful for my research. Aside from that, I was able to interview experts and they were all very enthusiastic to talk about the rice terraces.



イフガオ州の先住民の方々と一緒に...

This internship experience made me realize how important it is to protect our natural resources, most especially the rice terraces, which are ancient creations of the Ifugao people. I also learned about the Tinawon heirloom variety, which is the center of their farming rituals. It amazes me how the rice terraces helped the Ifugao people to resist the colonization by the Spaniards hundreds of years ago. I hope that other provinces in the Philippines can also learn from the ways of the Ifugao people, most especially on how they sustain their natural resources.

Overall, I am very happy with my internship, and I hope that more students from Hiroshima University can experience going to the Ifugao rice terraces. I am grateful to the IFSU GIAHS Research Center, most especially to my supervisor, Director Jude Baggo, who guided me well during my stay. I am also very thankful to the G.ecbo Program for allowing me to embark on this global internship. I hope I can go back in the future to study the other GIAHS sites.



展望台にて

My Research Assistant (RA) experience:

I have been an RA at the G.ecbo Program since April 2020. For the past three years, I have been contributing to the program's initiatives to equip its interns with the right knowledge and skills before pursuing their internship abroad. I enjoy being an RA at G.ecbo because I can apply my skills as a researcher and I can also give advice to students to further improve their work. Overall, my experiences in this program allowed me to grow more and interact with other passionate students at Hiroshima University (HU). Thank you very much for the opportunity to work with you, G.ecbo Program! Best of luck to the future RAs and interns. May you also have wonderful experiences during your stay at HU.

就活体験記

竹本 佑 さん TAKEMOTO Yu

マツダ株式会社 就職

2019年度 サティアムベンチャー・エンジニアリングサービス・プライベートルミテッド
(インド) 派遣 / 工学研究科((輸送・環境システム) 修了

－ インターンシップから現在までを振り返って

2021春に修士課程を卒業して、マツダ株式会社に技術系として就職しました。現在は、研究開発部門で車種開発に使われるCAE(計算機支援工学)技術の適用検討を行っています。担当業務では、金属材料の特性について扱うことが多く、学生時代に培った経験知識が活かしています。ちなみにですが、今も広島に住んでいるので、広島周辺のお好み焼き屋ヘドライブすることがしばしばあります。

－ 就職先企業・業界を選んだ理由、決め手

元々は素材を扱うメーカーを志望していたのですが、「自動車メーカーなら“多様な素材の使い道”を創造できる」という話に影響を受けたことと、日本の主幹産業に自ら携わって地元の産業・経済に貢献したい思いから、今の企業・業界を選びました。

現在の所属部門とは、学生時代から共同研究で交流があったため、職場の雰囲気や自分の働き方を学生時代から具体的に想像できたことも、就職先の決め手となりました。



Charminar(チャルミナール)
@ハイデラバード、インド



－ G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面や局面について

何故か就職先に、G.ecboで単身インドへ行った事が伝わっており、社員の方からそのメンタルとバイタリティを一目置かれることがあります。その時に、G.ecboでの経験は誇って良いものなのだなと感じました。異国の地で周囲と相互理解を深めながら目的を達成するという過程は、企業で多くの人々と関わり合って仕事を成し遂げることに似ている点があります。

－ 後輩へのアドバイス

自分も社会人なりたての半人前ですが、就活の心構えを2つアドバイスしたいと思います。

①「自分が生涯を掛けて何を成し遂げたいか、そのために仕事をどう活かすか?を明確に持つ」

豪邸に住むために大金を稼ぐでも、独立するために経験を積むでも構いません。それがブレなければ、将来の道筋が見えてくるはずです。

②「社会人の言葉は謙虚に受け止める」

就活を前にした皆様は、大学コミュニティでは最高学年のトップかもしれませんが、世の中から見れば社会に出ていない言わば“レベル0”の状態です。まずは、社会人の言葉は素直に聞きましょう。そして、たくさん質問してください。

今しかできない事がたくさんあります。色んな経験をして、社会へ大きく羽ばたいてください。



就職後の福岡旅行

－ 渡航先での生活や文化について

平日はam10:00～pm5:00頃までの間、派遣先企業のオフィスで研修や会議・設備見学を行い、夜は宿泊先のホテルで研修に関する文献調査や情報収集をして翌日に備えるという日々でした。週末は気分一転、現地の方に観光地やショッピングモールを案内していただき、ハイデラバードの人々の日常生活を体験しました。

－ インターンシップ前の事前準備について

「インターンが成功するかは、出国までの頑張り次第」だと思っています。

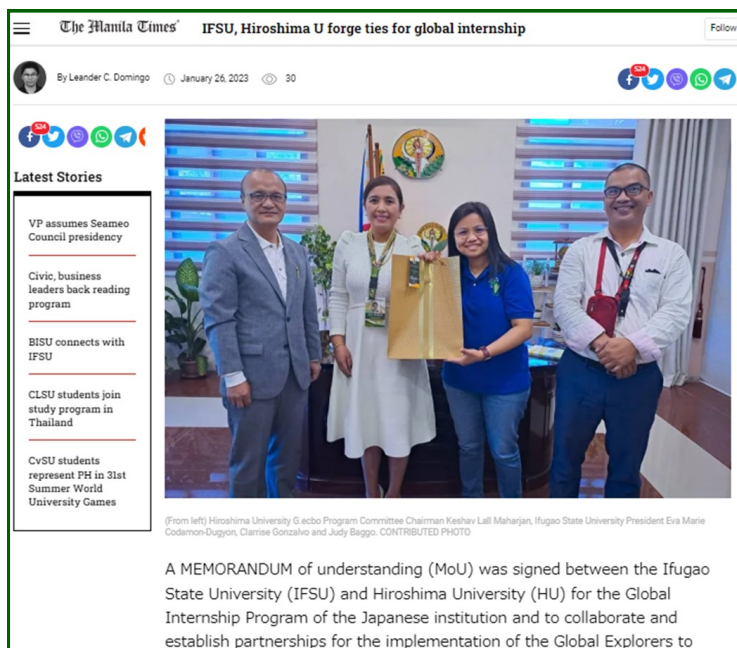
出国までに、講義や研究に追われながら、数々の課題を達成する必要があります。正直に語れば、その際に大学や周囲から得られるサポートは手厚いものとは言えません。

その厳しい期間を乗り越えられるだけの“強さ”と“ゆとり”を手に入れた人が、異国の地で課題を達成できるのだと思います。しかし、そのインターンもその先の目標を達成するための手段の1つに過ぎません。

インターンを志す後輩の皆様には、「明確な目標」「主体性」「強いメンタル」を持ってインターンに挑んで欲しいと思っています。

受入機関の開拓・拡充へ

G.ecboプログラムの一層の充実のため、様々な分野の受入機関の開拓に力をいれています。今年1月の開拓出張・協議の様子はフィリピンの新聞「The Manila Times」や、訪問先大学のホームページ、SNS等に掲載されました。



インターンシップ先開拓協議等のため、マハラジャン教授がフィリピン大学ロスバニョス校及び開発学部、イフガオ州立大学、世界重要農業遺産システム(Globally Important Agricultural Heritage Systems/略称GIAHS)センターを訪問。来年度から受入機関として追加されます。



2023年度G.ecbo海外インターンシップの募集は4月から開始予定です！派遣先等の詳細はHPをご覧ください。

事務局編集後記 前期はオンライン、後期は海外派遣が実現し、新型コロナウイルスの感染拡大以後の派遣活動再開の年でした。参加学生の満足度は高く、いい滑り出しとなりました。「自分の興味や研究に合わせて、研修先での計画を立てられた点がよかった。辛いことは多いけど、何をやっても経験値が上がるボーナスタイム」と言った学生がいます。来年度も、海外インターンシップを希望する学生に経験の場を提供していきたいと思っています。(事務局)



広島大学 学生プラザ 2階
グローバルキャリアデザインセンター内
G.ecboプログラム事務局
Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo



10年後の自分を探そう
世界と出会うインターンシップ

